

結論

イオニア反乱＝アリストゴラスとミレトスの有力者からなる党派が計画し指導した反乱

アリストゴラス反乱の原因＝ミレトスにおける支配権 (basileuein) を取り上げられてしまうのではないかという恐れの念 (Hdt.5.35.)。

奉仕と褒賞を結合因子とする社会の弱点＝解体因子としての失敗や怠慢、懲罰

秦漢帝国との相違：国家権力の存在は余りにも希薄

←イオニア諸都市にペルシア人或いはメディア人官吏の欠如

←イオニア諸都市に軍事力の欠如

反乱軍はサルディスまでペルシア軍と遭遇せず (Hdt.5.100.)

ペルシアの意思は藩属関係にある僭主を通じて伝達

奉仕と恩賞の機能：人々の忠誠を権力の頂点に向かわせ集中させる

同等者間での上位の者の好意をめぐる激しい競争

臣下の者が強大な影響力と力を持つのを予防

有力者同士の競争と反目はしばしば敗者を反逆へと走らせる

アリストゴラスの反逆：帝国の構造的矛盾から生み出された

僭主制の廃止とイソノミエの導入：大衆的支持を得ようとする思惑の産物

それ自体が反乱の原因ではない

従来の研究はこの問題を過大評価

逮捕された僭主は何れもイオニアの僭主ではない

ミュラサとテルメラは『アテナイ貢税表』ではカリヤ地区に編入

(R. Meiggs, *The Athenian Empire*, (Oxford 1972) Appendix 14, IV n.13, 34.)

キュメ、ミュティレネはアイオリス人の都市 (Hdt.4.138.)

ヘロドトスはアリストゴラスを除いてイオニアの僭主の名を挙げず

ダレイオスの下でどの程度僭主制が課せられていたのかは不明瞭

引き渡された僭主の内ミュティレネのコエスを除いては処刑されず (Hdt.5.38.)

傀儡僭主制が原因ならより厳しい処置を各都市は取った筈

僭主制が廃止されてもミレトスではアリストゴラスが、その他の都市では任命された将軍が指導権を掌握 (Hdt.5.38.)

僭主を辞した後もアリストゴラスは専制支配を続ける (cf. Hdt.6.5.)。

イオニア反乱は大衆の革命ではなく、有力者たちのクーデタ

僭主は放逐されても権力構造は基本的に変化なし

イオニア反乱はアリストゴラスと彼を支えてきた有力者たちとその同盟者たちの反乱

反ペルシア志向は明白

反乱の原因はペルシア帝国のシステムの中でアリストゴラスが追い詰めら

れたと強く感じた事 (Cf.Hdt.5.35.)

反乱を決断させたのはミュウスに集結していたイオニア艦隊の存在

(Hdt.5.36.) とナクソス遠征の失敗を通じてペルシアが軍事的に弱体であるという過

小評価 (Hdt.5.49.)